

主 題：キリストを愛し続けた人—パウロ（1）

聖書箇所：使徒の働き 26章15－20節

今日、私たちはパウロという人物についてごいっしょに学んでいきます。

みことばを見る前に、パウロについて少し、私たちが知っていることを復習してみましょう。彼は小アジア、現在のトルコの南東タルソという町で生まれたユダヤ人です。ベニヤミンの子孫でパリサイ派に属し、ローマ市民権を有していました。また、当時、ユダヤ教における最も有名で偉大な教師のひとりであるラバン（私たちの教師）という名誉ある呼び名を博し、すべての人に尊敬されていた律法学者ガマリエルから厳格な律法に関する教育を受けた人物です。そして、そのユダヤ教への熱心さのあまり、多くのキリスト者を迫害したほどであったとパウロ自身が証言しています。そのような人物が救われたのです。そのような人物が神の恵みによって新しく生まれ変わったのです。そして、真の主、真の神に仕える者とされました。今から私たちが見て行きたいことは、このパウロが信仰者としてどのような歩みをしたのか、どのように彼は生きたのかということです。そのことは彼自身の証が私たちに明らかにしてくれます。使徒の働き26章には、パウロがアグリッパ王の前に立って弁明している様子が出て来ます。ヘロデ大王の曾孫にあたるアグリッパ王です。彼はフェストがユダヤ駐在のローマ総督になった時、妹のベルニケを連れてカイザリヤを表敬訪問しました。そこで、このパウロと出会っているのです。

パウロはなぜユダヤ人たちによって訴えられているのでしょうか？彼にはその弁明の機会が与えられ、そして、彼が弁明をした様子がこの26章に出て来ます。15－18節、「**15 私が『主よ。あなたはどなたですか。』**と言いますと、主がこう言われました。『わたしは、あなたが迫害しているイエスである。』**16 起き上がって、自分の足で立ちなさい。わたしがあなたに現われたのは、あなたが見たこと、また、これから後わたしがあなたに現われて示そうとすることについて、あなたを奉仕者、また証人に任命するためである。17 わたしは、この民と異邦人との中からあなたを救い出し、彼らのところに遣わす。18 それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中であって御国を受け継がせるためである。』**」

つまり、パウロはアグリッパ王の前で「私は神から大切な務めが与えられている。私はこの神のメツセージを、この救いの知らせというものを、ユダヤ人を初め、異邦人に伝えて行かなければならない。その務めを私はいただいたのだ」と弁明するのです。そして、私が訴えられている原因はこの務めである、この働きをすることによって私はユダヤ人から訴えられているのだとパウロは言ったのです。さて、このパウロの弁明ですが、パウロはどのような信仰者として生きたのか、次のことばが私たちにヒントを与えてくれます。19節「**こういうわけで、アグリッパ王よ、私は、この天からの啓示にそむかず、**」と言っています。今、私たちが注目したいのは後半のところに「**私は、この天からの啓示にそむかず、**」と書かれているこのことばです。ここでパウロが言いたかった「**そむかず、**」と訳されている日本語のことばは、「聞き従わない者にならなかった」という意味です。つまり、パウロは「私は神からこのメツセージを伝えるという命令をいただいた、その命令に私は聞き従わない者になるのではなく、それに聞き従う者、つまり、それに従って行く者になったのだ」と、それがここでパウロが告白したことだったのです。神の命令に聞き従う、それがパウロの人生の特徴だったのです。神の命令に従って行く、神の教えに忠実に従って行く、それがパウロの特徴だったのです。このことはパウロ自身、人生の終焉を迎えた時にも同じようなことを言っています。Ⅱテモテ4：7「**私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。**」と。私は神からいただいた命令を忠実に守り行ってきた、神からの務めを私は忠実に果たして来た、まさに、私は今死を迎えようとしているけれども、自分のクリスチャンとしての人生を振り返った時に、私はこの主に対して忠実に歩んで来た。神に忠実に生きる、それがこのパウロの特徴です。

私たちが今から考えたいことは、なぜ、パウロは主に対してこのように忠実に歩もうとしたのかです。なぜ、彼はそこまで、いのちがけで神に忠実に従い続けたのかです。いったい何が彼を駆り立てていったのでしょうか？そのことを今、みことばを通して見ていきます。二つの理由を見ることが出来ます。

☆なぜ、パウロは主に忠実に生きたのか

1. パウロ自身、それが主が望まれていることだと知っていたから。

パウロは「神に対して忠実に生きることが主が望まれていることである」ということを知っていたのです。彼は先ほど見たように、旧約の教えに関しては右に出る者がいないほどよく知っていました。パウロは神に忠実に従って行くということが神の命令であるということを知っているのです。申命記の中

にこのように記されています。13：4「あなたがたの神、主に従って歩み、主を恐れなければならない。主の命令を守り、御声に聞き従い、主に仕え、主にすがらなければならない。」と、神がいったい私たち人間に何を望んでおられるのかをモーセは教えています。

(1) **命令である**：それは、あなたがたの神、主に従って歩むことである、神を恐れることである、神の命令を守って、神の御声に聞き従い、主に仕え、主にすがって生きること、それが、神が私たち人間に望んでいることだとモーセが教えてくれているのです。その命令をパウロはよく知っていました。だから、彼は神に忠実に従おうとしたのです。

(2) **主に喜ばれること**：同時に、神に忠実に従って行くということは、神が喜ばれることだということも知っているのです。サムエルという預言者がイスラエルの王であったサウルのところに出て行きます。神はアマネク人をすべて聖絶しなさい、家畜に至るまで生かしておいてはならないと厳しい命令を与えられました。ところが、サムエルがやって来ると家畜の鳴き声が聞こえるのです、そこで彼は「いったいあれは何なのだ。」と尋ねます。すると、サウル王は「いや、とつても良いものだけ、いけにえにささげるのにふさわしい傷のない動物を残しておきました」と、その時にサムエルが言ったことは「**主は主の御声に聞き従うことほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。**」、Iサムエル15：22のみことばです。サムエルは神からのメッセージを伝えたのです。神が望んでおられることはどんなにすばらしいいけにえをささげるかではない、「わたしの言ったことにあなたは従うかどうか」です。それが神の関心だということです。どの時代においても同じことなのです。今、私たちは動物のいけにえをしません。でも、私たちは自分のすべてを神にいけにえとしてささげるのです。いろいろな奉仕をする、こんな働きをする、でも、神の関心は変わっていないのです。あなたが神の教えに忠実に従っているかどうかです。あなたが神のみこころに忠実に従っているかどうかです。それが神の関心なのです。その基準は何も変わっていません。

(3) **主イエスがそのように生きた**：パウロが神に対して忠実に生きようとしたのは、それが神の命令であると知っていただけではない、それが神に喜ばれることだということも知っていた、同時に、パウロ自身、それが主イエス・キリストのこの地上における生き方そのものだったということも知っていたからです。ヨハネ6：38で「**わたしが天から下って来たのは、自分のこころを行なうためではなく、わたしを遣わした方のみこころを行なうためです。**」とイエスご自身がそう言われました。人としてこの世にお生まれになったイエスは神でなくなったのではありません。神でありながら人となられたこのイエス・キリストは、人としてのこの地上における生活において何をなさったのか？自分の思い通りに生きるのではなく、父なる神のみこころに忠実に従おうとした、それがイエスの生き様だったのです。ですから、パウロはイエスを愛する者として、イエスがそのように生きたのだから、私の責任もこの父なる神に対して忠実に従い続けて行くことだと、そのように彼は生きたのです。

(4) **主イエスが忠実そのもの**：もう一つ付け加えるとしたら、「忠実」というのはイエスそのものでした。黙示録3章の中でラオデキヤの教会に対してこのようなメッセージがあります。3：14「**また、ラオデキヤにある教会の御使いに書き送れ。『アーメンである方、忠実で、真実な証人、神に造られたものの根源である方がこう言われる。』**」と、イエス・キリストのことを教えています。イエス・キリストとはいったいだれか？アーメンである方であり、そして忠実である方である、それがイエスだとみことばが教えるのです。余談になりますが、この「**神に造られたものの根源である**」という「**根源**」ということばを聞いて、イエスも同じように神によって造られた存在であると解釈するならば、それはみことばを正しく理解していません。そのようなことを言っているではありません。「**根源**」とは、起源、第一の原因、本源、つまり、大本（おおもと）であるとか、物の起こりであるとう意味です。つまり、ここで言われていることは、イエス・キリストによってすべてのことが起こったということです。神がイエスを創造したといっているのではなく、イエスによってすべてのことが起こって来たと、そのことを言っているのです。

今、見てきたように、パウロが神に対して忠実に生きようとしたのは、それが神の命令であることも、それが神に喜ばれることであることも、そして、主ご自身がそのように生きたことも、そして、主ご自身がそのような存在であるということを知っていた、だから、彼は神に対して忠実に生きようとしたのです。

皆さん、あなたがしっかり覚えなければいけないことは、あなたが神の前に忠実に歩むならば神はあなたを喜び、あなたを祝してくださるということです。どのように立派な働きをしよう、どんな奉仕をしよう、神の関心はあなたがみことばに対して忠実に従って行くかどうかです。それが神の関心です。だから旧約聖書、また、新約聖書の勇者たち、神が祝された人々には、皆共通していることがあるのです。今、皆さんがよくご存じの人物を紹介して行きます。彼らは同じことで共通しています。

ノア：ノアに関して、創世記6：22でこのように記されています。「**ノアは、すべて神が命じられたとおりにし、そのように行なった。**」と、なぜ、ノアが神に祝されたのでしょうか？書いてある通りです。彼はすべて神が命じられた通りに行ったのです。神に対して忠実であった、だから、神はノアを祝して用いたのです。

アブラハム：創世記12章にアブラハムの契約のことが出て来ます。神から「**わたしが示す地へ行きなさい。**」（創世記12：1）と言われたとき、アブラハムはどこに行くのか分かりませんでした、でも、神からの命令だからとして出て行くのです。4節に「**アブラムは主がお告げになったとおりに出かけた。ロトも彼といっしょに出かけた。アブラムがカランを出したときは、七十五歳であった。**」と、これがアブラハムだったのです。そして、ご存じのように創世記22章に、神はアブラハムに自分の愛するひとり子、イサクを神にささげなさいと言われました。それでイサクを伴ってたきぎを背負わせて出かけるのです。そして、祭壇を築きたきぎをのせます、「**火とたきぎはありますが、全焼のいけにえのための羊は、どこにあるのですか。**」、「**イサク。神ご自身が全焼のいけにえの羊を備えてくださるのだ。**」（創世記22：7-8）と、イサクをそのたきぎの上ののせて、ナイフを持って殺そうとしたとき、22：11-12「**そのとき、主の使いが天から彼を呼び、「アブラハム。アブラハム。」と仰せられた。彼は答えた。「はい。ここにおります。」**：12 御使いは仰せられた。「**あなたの手を、その子に下してはならない。その子に何もしてはならない。今、わたしは、あなたが神を恐れることがよくわかった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しまないでわたしにささげた。**」、アブラハムは何をしたのですか？神の命令に従ったのです。たとえ、自分の愛する子をささげることになったとしても、その背後には神の完全な計画がある、だから、私はそれを信じて神に従って行こうと。私たち親がそのような命令を受けたときに、どれほど難しいかよく分かります。皆さんもお分かりになるでしょう。アブラハムにとっても易しいことではなかったはずです。自分の愛する子を捧げるなんて…。でも、アブラハムは神に対して忠実であり続けようとしたのです。だから、神は彼を祝したのです。皆さん、神は意地悪な方ではありません。私たちが悲しんだり苦しんだりするのを見て喜んでおられる神ではありません。みことばが教えていることは「**すべてのことを働かせて益とする**」です。最高なことしかできないお方です。私たちが覚えなければならぬことは、そのようなすばらしい間違いのない完璧な神に対して、もっと信頼を置かなければいけないことです。アブラハムを見て、彼は別格の人物であって私とは違うとも思っているなら、大切なポイントを見落としています。彼も私たちと同じように罪人であり、私たちと同じように弱かった、しかし、彼が神に喜ばれたのは彼が神を信じ切ったことです。私たちもそれができるはずです。なぜなら、私たちも神がどんなにすばらしい方で、私たちが心から愛してくださっている方であるということを知っているからです。この神はあなたのためにいのちを捨ててくださった、どうしてそのような方があなたにとって辛いことばかりを与えることができるでしょう？「**すべてのことを働かせて益とする**」、それで十分ではないですか？私たちに必要なのは、その方がそのようなお方であることを心から受け入れることです。この信仰の勇者たちのように。

ヨシュアとカレブ：信仰の勇者でした。民数記32：12には「**…彼らは主に従い通したからである。**」とあります。それが彼らの特徴でした。人々が何を言おうと、彼らの見たことがいかに人間的に恐怖をもたらすような出来事であったとしても、恐れを抱かせる出来事であったとしても、彼らの特徴はその中であって主を信頼し、信頼し続けたのです。だから神は祝したのです。

エリヤ：彼はアハブ王のところに行って、「**私の仕えているイスラエルの神、主は生きておられる。私のことばによらなければ、ここ二、三年の間は露も雨も降らないであろう。**」（1列王17：5）という知らせを告げます。その後、神がエリヤに何を命じたのか、2-5節「**それから、彼に次のような主のことばがあった。：3 「ここを去って東へ向かい、ヨルダン川の東にあるケリテ川のほとりに身を隠せ。：4 そして、その川の水を飲まなければならない。わたしは鳥に、そこであなたを養うように命じた。」**：5 **それで、彼は行って、主のことばのとおりにした。すなわち、彼はヨルダン川の東にあるケリテ川のほとりに行って住んだ。**」。

ヒゼキヤ：Ⅱ列王18：6「**彼は主に堅くすがって離れることなく、主がモーセに命じられた命令を守った。**」

ダビデ：詩篇119：106「**私は誓い、そして果たしてきました。あなたの義のさばきを守ることを。**」

こうして旧約聖書の勇者たちを見て行くと皆共通しています。彼らは皆、神に従い続けたのです、彼らの歩みは神の前に忠実な歩みだったのです。だから、神は彼らを祝し彼らを大いに用いられたのです。その基準は新約に移っても何も変わっていません。

ゼカリヤ：バプテスマのヨハネの父親です。彼も、また、妻のエリサベツもこのような人だったと教えています。ルカ1：6「**ふたりとも、神の御前に正しく、主のすべての戒めと定めを落度なく踏み行なっていた。**」旧約の時代の勇者たちも、新約の時代の勇者たちも共通していることは、彼らが主に忠実に従い続けたことです。そして、神は彼らを大いに祝されたのです。そして、パウロもそうだったのです。

そこで私たちは考えなければいけません。あなたの信仰の歩みはどうか？神に対して忠実ですか？あなたは主のみことばに対して忠実に従おうとしていますか？神が関心を持っておられるのはそこです。パウロがどうして神に忠実に従ったのか？それは神の命令であるだけではない、神が喜んでくださることだからです。それこそ神が望んでおられることだから、彼はそのように生きようとしたのです。

2. パウロが神を愛していたから。

パウロは神を心から愛していた、それが従順の歩みとなって現われたのです。昔、このようなゴスペルがありました。「私はあなたに仕えます。それはあなたを愛しているから。」と。パウロは神を心から愛していました。ですから、このように言うことができます。「主への忠実というのは神に対する愛の証しです。」と。ヨハネはIヨハネ5：3で「神を愛するとは、神の命令を守ることです。…」と言いました。神を愛するということは神が命じておられることを忠実に守り行なって行くことだと。パウロは忠実に守り行なったのです。パウロは神の命令に忠実に従おうとしたのです。それは彼が神を愛していたからです。

(1) 神への愛はそれにふさわしい生き方をもたらす

IIコリント5：14を開けてください。「**というのは、キリストの愛が私たちを取り囲んでいるからです。**」、この「**取り囲む**」ということばは「服従などを強いる、追い立てる、促す、駆り立てる」という意味もっています。つまり、パウロはキリストが私を愛してくださっているその愛、それが私を追い立てて行く、私を駆り立てて行くと言います。しかも、この時制は現在形です。パウロはそのように習慣的に継続的に生きていたのです。皆さん、神への愛はそれにふさわしい生き方、行ないを生み出すのです。そのことをパウロがここで教えてくれるのです。ですから、14節にこう続きます。「**私たちはこう考えました。**」と、なぜ、このようなことばがここに入っているのでしょうか？パウロが言いたかったことは、私がイエスの十字架を見て、あの十字架でイエスが私のためにいのちを捨ててくださったその大きな犠牲を考えたときに、私に考えられることはこの一つしかない、その事実から引き出せることは一つしかないということです。それがここで言われているのです。14節「**ひとりの人がすべての人のために死んだ以上、すべての人が死んだのです。**」、パウロはもう今までの私は死んだ、自分のために生きてきた私はもう死んだのだ、そして、15節「**また、キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。**」と、つまり、パウロがイエスの十字架を見て、その大きな犠牲を見て、その愛を見た時に引き出した唯一の結論がこれなのです。「主のために生きよう」、これしかない、これがこの神に対してふさわしい、私ができる唯一のことだと言うのです。

自分に対するキリストの深く大きな愛に心向けるとき、その愛が私たちの心を満たすとき、出てくる結論は、パウロが言う通り「**私たちはこう考えました。**」、私はこの地上を、この人生を主のために生きて行こう、主に従って生きて行こうと。神に対する愛とは具体的な歩みを生み出します。神がどれほど大きな愛をもって私たちを愛してくださっているか、そのことを覚えるときに、私たちはそれに答えようとしします。皆さん、神が望んでおられることは、従順でありなさい、わたしに忠実に従って来なさい、です。パウロはそのように生きようとしたのです。それは彼自身がこの神に対する愛に満たされているからです。ですから、この忠実な歩みというのは、私たちの神への愛を明らかにするのです。

(2) 神への愛は救いの証

主への愛というのは救いの証しでもあります。神を愛するということはその人が救われていることの証拠なのです。救われていない人に神を愛することはできません。パウロは確かに、神の命令を守ることが最優先しました。彼はいのちをかけて守ろうとしました。というのは、神の愛というのはいのちがけだったからです。神の愛というのは、まず自発的でした。神ご自身がご自身の意志を持って、自ら進んで私たちを愛そうとされたのです。愛される資格のない私たちを神は一方的に愛そうとされた、自発的なものです。同時に、神の愛は犠牲的です。犠牲の伴ったものです。ご自分のいのちを犠牲にされた…。そして、献身的でもありました。というのは、神は自分のことよりも父のみこころを優先したからです。パウロはその愛に倣って生きていたのです。パウロの証を聞いてください。彼はこう言います。

Iコリント9：16「**というのは、私が福音を宣べ伝えても、それは私の誇りにはなりません。そのことは、私がどうしても、しなければならぬことだからです。もし福音を宣べ伝えなかつたら、私はわざわざに会います。**」、パウロはいよいよこの務めを果たそうとしたのでしょうか？出て行って、ユダヤ人や異邦人、人々にキリストの救いを宣べ伝えなさいというこの命令に対して彼ははいよいよしていたのではありません。自分から進んでそれをやろうとしました。なぜなら、愛というのは自発的な行動を生み出すからです。

同時に、彼は特にユダヤ人たちに対してこのように言っています。ローマ9：3「**もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願いたい**

のです。」、パウロが言ったことは、もし、ユダヤ人、私の愛するその同国民が、同胞が救われるためだったら私は滅んでもかまわない、私は地獄に行ってもかまわない、彼らが救われるのだったら…と。パウロがもっていた愛とはこのように犠牲的なものです。喜んで自分のいのちさえも、自分の永遠さえも彼らのために捨てたいと、そのような愛をもって人々を愛していたのです。そして、彼はまたこのように言います。使徒20：24「けれども、私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。」、彼自身の生き様、彼が一番望んだことは、神に対して、神からいただいた使命に対して、その命令に対して忠実に生きて行こうということです。そのために死を経験することがあっても私はかまわない、自分の思い取りに生きることよりも、神のみこころに従って生きることを彼は選択しているのです。

先に、私たちが神の愛を見たとき、その見て来たことを私たちはパウロ自身の内に見ます。なぜ、パウロはこのような自発的な犠牲的な、そして、献身的な愛をもって人々を愛したのでしょうか？それは、彼の内にこの神の愛が与えられたからです。私たちは人を愛することなどできません。でも、神が私たちに愛してくださり、神の愛が分かることによって、私たちもその愛をもって人を愛することができる者に変えられて行くのです。パウロ自身のその人々に対する愛を見た時、明らかにそれは神から出たものです。すなわち、彼が救いに与っていたことの証拠です。パウロが願ったことは、神に喜んでいただくことでした。それしかなかったのです。ピリピ1：20でこのように言っています。「それは、私がどういふばあいにも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにしても、死ぬにしても、私の身によって、キリストのすばらしさが現わされることを求める私の切なる願いと望みにかなっているのです。」、そして、21節「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。」、パウロが望んでいたことはただ一つです。私のすることを通して、私の語ることを通して、私の考えることを通して、私のすべてを通して神が喜んでくださったらそれで良い、それが私の人生だ、そのためだけに私は生きています。これは救われている人の証です。なぜなら、救われる前の私たちは、本当の喜びとか満足とか、充実感、幸せというものを神以外のところに求めていたからです。しかし、イエス・キリストを信じたときに、私たちはこの神の内にそれがあること、そして、私たちが神に祝福をいただいて生きるためには、神に従って生きて行くことであると、そのことを学び、そして、それを実践するときに、私たちは本当に神の約束を経験するのです。神の平安を、神の喜びを、永遠に対する希望を、そして、私たちは物がなくても物があっても満足して感謝して歩んで行く者に生まれ変わったのです。

クリスチャンである皆さん！神はあなたをそのような者に変えてくださったのです。同じように変えられたパウロは、そのすばらしい喜びを知ったから、もう私は他の今まで夢中になっていたものはどうでもいい、私はこの地上にあっても、本当に心を満たしてくれる、喜びに満たしてくれる、感謝に溢れさせてくださる、私の上に豊かな祝福を与えてくれる、その唯一のことだけを求めて行こう、それは神のみことばに従って行くこと、神に忠実に従って行くことと、そのように彼は生きたのです。なぜなら、彼は生まれ変わっていたからです。本当のものを見つけたからです。探し求めていたものを見つけたからです。このような変化はイエスを信じたすべての人に、どの時代であっても起こることです。救われた人というのは変わるのです。救われた人はこのように救ってくださった神の愛によって人を愛する者になるのです。それによってその人が救われていることが明らかになるのです。

ペテロもこのように言っています。Iペテロ1：2「父なる神の予知に従い、御霊の聖めによって、イエス・キリストに従うように、またその血の注ぎかけを受けるように選ばれた人々へ。どうか、恵みと平安が、あなたがたの上にありますように豊かにされますように。」、「選ばれた人々」、つまり救われた人々のことです。神の前に聖くされ、聖い神の前に立つことが許された、救われた人のことです。この「救い」に関してペテロが教えることが三つあります。(a) 神の予知：この救いは「神の予知に従い」、つまり、神のご計画に従っているのです。(b) 御霊の聖め：神はイエスを信じた人、罪から聖めてくださる、聖い神の前に立つ、聖い者にしてくださる、それで終わりではありません。罪が赦されて聖くされるだけではない、その瞬間から、聖い者としての生き方が始まるのです。だから、クリスチャンは罪が洗われて聖められただけではない、聖い生き方をする者です。それが救いだとペテロが教えてくれるのです。(c) 血の注ぎかけ：血の注ぎかけを受ける、確かに、イエスが十字架で身代わりとなって死んでくださった、その十字架の死によって、信じるすべての者の罪が赦される、確かにそうです。しかし、ここでペテロが言いたかったことはそれだけではありません。彼は旧約聖書のモーセが行なったイスラエルの人々に対する血の注ぎかけと関連してこのことを言っているのです。これは、出エジプト24章に出てくることです。モーセが主のみことばを、そしてまた、神の定めを民に話したのです。すると、それを聞いていた民は「主の仰せられたことはみな行ない、聞き従います。」(24：7)と叫んだのです。そのときにモーセがしたことは、いけにえの血を祭壇と民に注ぎかけたのです。このような出来事は一回しか出てきません。なぜ、

このようなことをモーセが行なったのでしょうか？それは、そのように神が仰せられたことはみな行ないますと言った人々に対して、「いいですか皆さん、今、皆さんは神と契約を結んだのです」とそのことを象徴したのです。あなたは神と契約を結んだ、どのような契約か、私は神に対して忠実に生きて行くという約束です。だから、この2節に「イエス・キリストに従うように」と書いてあるのです。つまり、ペテロは、イエスを信じて罪が赦された人、救われた人の特徴というのは、その人はキリストに従う者になると言っているのです。

もう一人の人物の証を見てみましょう。ヨハネの手紙を見てください。パウロの証を聞き、ペテロの証を聞き、そして、三人目はヨハネの証です。Iヨハネ2：3-5にこのように記されています。「もし、**私たちが神の命令を守るなら、それによって、私たちは神を知っていることがわかります。：4 神を知っていると**言いながら、**その命令を守らない者は、偽り者であり、真理はその人のうちにありません。：5**しかし、**みことばを守っている者なら、その人のうちには、確かに神の愛が全うされているのです。それによって、私たちが神のうちにいることがわかります。」**、ヨハネは何を言っているのでしょうか？神の命令を守ろうとしている人、それは、神を知っている人だと、すなわち、救われている人だとヨハネは言っているのです。では、神の命令に従おうとしていない人はどうでしょうか？その人は救われていないとヨハネは言っています。4節にある通り、どれほど、口で自分はクリスチャンだと言っても、その人が神の命令に従おうとしていないなら、それが彼の生き方だったら、つまり、関心が全くない、聖書を聞き、聖書の話も知っている、でも、その人は心から神の教えに従って行こうという思いを持っていない、それなら、その人の信仰、いくら信仰があると言ってもそれは怪しいものだ、ヨハネはもっとはっきりと「**真理はその人のうちにありません。」**と言っています。その人はうそつきだ、つまり、救われていると言いながら実は救われていないと言うのです。ですから、ヨハネがはっきり言ったことは、神のみことばに従おうとしている人、その人は救われているけれども、そういう思いのない人は救われていない、それがヨハネのメッセージです。

○忠実に歩もうとしていない人は救われていない人です。その二つの例を挙げます。

(1) イスラエルの民

ネヘミヤがこう言います。9：16「**しかし、彼ら、すなわち私たちの先祖は、かつてにふるまい、うなじをこわくし、あなたの命令に聞き従いませんでした。」**、17節「**彼らは聞き従うことを拒み、あなたが彼らの間で行なわれた奇しいみわざを記憶もせず、かえってうなじをこわくし、ひとりのかしらを立ててエジプトでの奴隷の身に戻ろうとしました。」**、このイスラエルの先祖たちの特徴は何だったのか？ネヘミヤのことばを借りるなら、彼らは不従順だったのです。

(2) イエスの弟子たち

新約聖書、ルカの福音書の中でイエスが弟子たちに対してこのように言われました。ルカ6：46「**なぜ、わたしを『主よ、主よ。』と呼びながら、わたしの言うことを行なわないのですか。」**と、その後、イエスはこのように続けます。47-49節「**わたしのもとに来て、わたしのことばを聞き、それを行なう人たちがどんな人に似ているか、あなたがたに示しましょう。：48 その人は、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、それから家を建てた人に似ています。洪水になり、川の水がその家に押し寄せたときも、しっかり建てられていたから、びくともしませんでした。：49 聞いても実行しない人は、土台なしで地面に家を建てた人に似ています。川の水が押し寄せると、家は一べんに倒れてしまい、そのこわれ方はひどいものとなりました。」**、何が言われているのでしょうか？イエスが言われたことは「わたしの言うことを行なうかどうかによって、その人が救われているかどうかは明らかになる」ということです。というのは、イエスがここで人々にお話になったとき、「『**主よ、主よ。』**と呼びながら、**わたしの言うことを行なわないのですか。」**と、彼らの特徴は明らかです。彼らは不従順だったのです。彼らはまさに土台なしで家を建てた人々だったのです。

ですから、イスラエルの人々に対するネヘミヤのことばを聞いても、イエスご自身が弟子たちにお話しになったことを聞いても、はっきりしていることは、不従順というのは救われていない者の特徴だということなのです。

さて皆さん、「忠実である」、これこそ本当のキリスト者の生き方そのものです。これは、神を愛していることの証です。パウロはそのことを自身の生き方によって証したのです。そこで、あなたはいかがですか？神の警告というのは、クリスチャンだと思い込んでいる人が多いということです。救われていると思っているけれど、そうでない人がたくさんいるということです。どのようにしてそれを見分けることができるのでしょうか？みことばは私たちに明確に教えてくれました。神に忠実に従おうとしているかどうかです。もちろん、私たちは赦されていても罪があるゆえに失敗の連続です。悲しいことに私たちは罪を犯してしまいます。しかし、救われた人の特徴は、いつも心の中に私は神に従って行きたい、私は神を喜ばせて行きたい、とそういう思いがあるのです。だから、罪を犯せば何をするか？それをす

ぐに告白して神に赦していただくとうとします。なぜなら、いつも神の前に喜ばれていたいからです。

それがあなたの歩みですか？あなたはどのように歩んでおられますか？あなたはイエス・キリストを信じたと言ったその時から、生き方が変わっていますか？これまで、自分中心に生きてきたあなたは、神を中心にして、神に喜ばれることを選択して、そのように生きて行きたいと願い、そのように歩んでおられますか？いいですか、自称クリスチャンが多いのです。そのような人たちが溢れているのです。なぜ、私たちはそのことを繰り返すのか？みことばが繰り返し教えているだけではないのです。ここにいる皆さん、あなたが救われていると信じていたけれど、実はそうではなかったということがないように、そのためです。どうすれば救われていることが分かるのでしょうか？自分の生活を振り返ってみてください。自分の心の中にある、その本当の自分を見てください。自分は何を望んでいるかです。救われている人は主に従って行こうとする人です。失敗しても主に従って行こうと。そして、心から主を愛している人です。しかし、救われていない人は、どんなに素晴らしい働きをしても、どんなに素晴らしい奉仕をしても、心の中にハッキリしていることがあります、「私は主に従って行きたくない」との思いです。それがみことばが教えることです。あなたはどちらなのでしょう？ここにおられる一人一人が、今、自分の心を吟味して、そして、この救いから漏れることがないようにしてください。それはあなたと神との間で決めなければいけないことです。ここにいるすべての人がこの救いを確実にご自分のものとして、生まれ変わって歩み始めることです。クリスチャンであって、それでいながら怠けている人は、十字架を見上げなくてははいけません。キリストの犠牲を思い出さなければいけません。パウロは生きたのです。喜んでこのキリストのために死のうと思ったのです。そのような覚悟をもって、あなたはクリスチャン生活を歩んでおられますか？言い訳を止めなければならぬ、なぜなら、神はその言い訳をしているあなたの心をご存じだからです。どのようにしてあなたは今から生き始めますか？どのようにして今日から歩み始めますか？

主に忠実に生きることです。それが、主があなたに望んでおられることです。

あなたは、どうなさいますか？